

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Phonological structure of mimetic neologisms and segmental unmarkedness

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 那須, 昭夫, NASU, Akio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002131">https://doi.org/10.15084/00002131</a>

# 新造オノマトペの音韻構造と分節の無標性

那須 昭夫

(大阪外国語大学)

## キーワード

新造オノマトペ, 舌頂子音, 母音の無標値, 相補分布, 無標分節構造

## 要旨

オノマトペの音韻構造については従来, 辞典に掲載された一般に認知度の高い語彙を対象とした分析が主になされてきたが, その一方でオノマトペが新たに作り出される際の文法性——すなわちオノマトペの生成的側面に働く音韻原理の探究に関しては研究が希薄であった。本稿では, 漫画表現に用いられる部分反復オノマトペの構造を分析することで, 新たな形式が作り出される際に起こる音韻構造の性質について考察する。漫画には既存の形式の枠に収まりきらない新奇な語形が豊富に現れるが, それらの中には規則的かつ生産的な音韻構造を反映した形式も決して少なくない。本研究では新造語幹の第一音節の構造に着目し, これまでの音韻理論研究においてその無標性が指摘されている舌頂子音ならびに母音 /u/ が, この音節を構成する要素として現れやすいことを定量的見地から明らかにする。また, 舌頂子音と母音の組み合わせに日本語の拍体系の特質を背景とした相補的な分布が見出されることを論じる。

## 1. はじめに

オノマトペの形態が多様なバリエーションを豊富に含んでいることはよく知られている。このことは, 各種辞典に掲載されている既存語彙を見た範囲でも理解できるが(天沼 1974; 浅野 1978; Kakehi, Tamori, & Schourup 1996など), オノマトペの生産性はむしろ既存の語彙の枠に収まりきらない新たな語形の中にこそ見出すことができる。とりわけ漫画表現に現れるオノマトペは新造形式の宝庫であり, それらを観察することによって, 新しい語形が作り出される際にどのような音韻的・形態的な原理が作用しているかを明らかにすることができる。漫画に用いられる新造オノマトペには, 作者の一時的な創出によると思われる臨時的な形式もたしかに多い。しかしながら, 必ずしも全ての新造オノマトペがそうした泡沫的な性格を備えているわけではない。中には, 見た目の形式は新奇なものでありながらも, その音韻構造に規則的かつ生産的な性質を含むオノマトペが少なからず観察される。

本稿では, 漫画に現れるオノマトペの中からたとえば(1)に挙げるような部分反復構造を持つものに注目し, その音韻構造について観察する。

### (1) 部分反復形

/pata/    pata-ta-Q    (パタタッ)    /gata/    gata-ta-N    (ガタタン)

/basa/	basa-sa-Q	(バササッ)	/tiri/	tiri-ri-N	(チリリン)
/hyuru/	hyuru-ru-Q	(ヒュルルッ)	/kara/	kara-ra-N	(カララン)
/zawa/	zawa-wa-Q	(ザワワッ)	/buru/	buru-ru-N	(ブルルン)

新たに作り出される部分反復オノマトベ(新造オノマトベ)では、その第一音節の分節構造に顕著な特徴が見られる。本論で詳細に述べるように、新造オノマトベでは既存の語形と比べると第一音節の子音(C<sub>i</sub>)に舌頂音 /d, z/ が現れやすく、第一音節の母音(V<sub>i</sub>)には /u/ が圧倒的に多く現れやすい。興味深いことに、これらの分節音は音韻論的な無標要素として振る舞うことが従来指摘されている(Steriade 1987a,b; Paradis & Prunet 1991a; Itô & Mester 1996; Katayama 1998)。こうした無標要素が量的な面でも多く現れるということは、新造オノマトベの語形成において明らかに何らかの生産的な音韻原理が作用していることを窺わせる。

以下本稿では、まず第2節において部分反復オノマトベについて概観するとともに、本研究で行った語彙検索の内容について説明し、第3節以降で具体的な分析を行う。その中で、①新造オノマトベと既存オノマトベの音韻構造上の相違点を指摘し(第3節)、②新造語幹の第一音節において子音・母音が特徴的な分布を見せていることを定量的な観点から明らかにする(第4節)。続いて、③第一音節における子音と母音の組み合わせに無標な構造が現れやすいことを論じ、④特に母音 /u/ に関して、これが日本語の一般的な音韻構造にも観察される無標値であることを論じる(第5・6節)。

## 2. 語形と資料

### 2.1. 部分反復形

漫画で用いられるオノマトベの形態には実に多彩なバリエーションが含まれるが、本稿では(1)に挙げたような部分反復構造を持つ形式を観察し、その音韻構造上の特徴を探る。部分反復(partial reduplication)とは、ベースとなる形式の一部分だけを反復する語形成で、同様な語形成の事例は汎言語的に数多く報告されている(Broselow & McCarthy 1983-84; McCarthy & Prince 1986, 1996)。この語形成では特定の韻律範疇が複写の鋳型となるのが特徴で、(1)のオノマトベでも軽音節が鋳型となって規則的に反復辞(reduplicant)が生成されている。また、このタイプの形態は漫画表現に用いられるだけでなく既存の語彙においてもしばしば観察されることから、日本語のオノマトベの体系でもかなり規則的かつ生産的な性格を持つ形式だと考えられる。

しかしながら、一定の文法性を備えた生産的な形式であるにも関わらず、意外なことに部分反復形は既存語彙を集めたオノマトベ辞典では取り上げられていないことが多い。仮に掲載されていたとしても「わははは」「おほほほ」といった特定の笑い声を表すオノマトベに限られており、(1)に挙げたような一般的なパターンは管見の限り辞典で取り上げられている事例を知らない。部分反復形は生産的な語形成でありながらも、その実態はこれまで案外十分には知られていないのである。こうした辞典に掲載されにくい新造形式について考察するためには、辞典以外の媒体

からも積極的に言語事実を探る必要がある。本研究において漫画作品のオノマトペを観察して言語事実を探る方針をとったのは上述の事情による。また、辞典に掲載された既成の語彙ではなく、新たに作り出されるオノマトペを観察することによって、オノマトペに関してこれまで知られることのなかった特性——とりわけ、新造形式においても生産的かつ一般的な音韻の原理が働いている様子を捉えることができる<sup>1</sup>。

ただし、漫画を対象とする場合には、作品で用いられている語形の一般性に関する問題——すなわち当該の形式が作者の個人的な創作による形式であるがゆえに一般的な音韻構造を反映していないのではないかとの懸念が常につきまとう。この問題を克服するため、本研究では特定の作者による作品に偏らないよう観察対象の作品の幅を可能な限り広げるとともに、語彙検索により得られた資料の定量的な分析を試みる。

## 2.2. 語彙の検索

本研究では漫画18作品を検索対象とし、その中から部分反復形を収集した。語形の検索に際しては、(1)のオノマトペの構造に従って、第一モーラと第二モーラが異なる分節構造を持つことおよび第二モーラの構造が繰り返されていることを基準とした。また、部分反復形には形態上の特性として複数のバリエーション(2)が現れる点に留意し、こうしたバリエーションを伴う形式は全て共通のベースから派生される単一の項目として扱った。

### (2) バリエーション

- a. 語末の接尾辞の存否および種類にバリエーションがある。
- b. 反復回数に制限がないため、反復辞の数の異なるバリエーションがある。
- c. 最終音節に長母音が挿入されるか否かをめぐるバリエーションがある。

一例として「ガタ」という語幹を含む形式を取り上げて説明すると、その部分反復形には次に例示するようないくつかのバリエーションが現れ得る。

### (3) 「ガタ」

- a. ガタタッ
- b. ガタタン
- c. ガタタ
- d. ガタタタッ
- e. ガタターン

(3a)と(3b)は語末の接尾辞のタイプに違いが見られ、(3c)は接尾辞を持たない形式であるが、これらはいずれも共通の語幹「ガタ」をベースに生じる形である。また、(3d)では反復辞の数が(3a-c)に比べ一つ増えているが、これも決定的な違いではなく、「ガタ」というベースから派生される点で(3a-c)と共通性がある。さらに(3e)のように最終音節に長母音が挿入されるバリエーションも見られるが、この場合もやはりベースの構造が共通しているため決定的な項目

の違いを意味するものではない。つまり(3)には都合5つの形態が挙げられているものの、これらは全て共通のベース「ガタ」から派生される単一の項目として扱われることになる。要するに語頭2音節の構造が共有されていることが重要なのであり、そこから右側の音韻構造に起こるバリエーションは決定的な差異には関わらない。

上述の方針に則って検索したところ、合計393個の項目が抽出された。最前述べたように、この「項目」の数とは「語頭2音節の構造に着目した異なり数」を意味する。抽出された項目(語頭2音節の形式)はまとめて本論末尾に[資料1]として示す。本稿で分析対象とするのはこれらの形式の音韻構造である。なお,[資料2]には作品中に出てきた具体的な語形の例を語頭2音節の構造別に挙げておく。この資料の[ ]中に示した番号は本論末尾の「作品一覧」での作品番号に対応する。

### 3. 既存形と新造形

#### 3.1. 新造語幹

[資料1]を一覧して分かるように、語彙検索により抽出された語幹の中には、よく知られた既存の形式もあれば一般に出会う機会の少ない新奇な形式も含まれている。分析上これらを一律に処理するのは当然ながら好ましい方法とは言えず、既存形と新造形を一定の観点から分けておく必要がある。ただ、どれが既存の形でどれが新奇な形であるかは一概には判別しがたく、ある個人にとって一般的と感じられる形式であっても別の個人にとっては新奇な感を抱かせる形式であるなど、既存語彙としての存否の判断は多分に個人々の主観に左右される恐れがある。

そこで本研究では、辞典の掲載対象となる語彙には一定の容認性が備わっているとの考えに立ち、既刊のオノマトペ辞典(Kakehi, Tamori & Schourup 1996;KTS)の記述を参考に既存語としての存否を判断する方針をとった。KTS(1996)を選んだのは、この辞典が各種オノマトペ辞典と比べて掲載項目数が多く<sup>2</sup>、実例による裏づけのある語形を豊富に有しており、かつ実例採取に用いた資料が過去25年間に刊行された文学作品や新聞記事であるなど、現代日本語のオノマトペ語彙を豊富に収めているためである(KTS 1996:xvi-xviii)。また、音韻・形態・統語・意味にわたり言語学的な所見が付されているなど、言語研究のデータベースとしての性格を備えている点においても、既存語／新造語の選り分け作業に適した内容となっている。

本研究では、オノマトペの各種形態の中でもより定型的で安定性の高い単純反復形(「ピカピカ」など)に着目し,[資料1]に挙げた部分反復語幹を単純に繰り返した形がKTS(1996)に掲載されているかどうかをまず検査した。すなわち,[資料1]に挙げた部分反復語幹が単純反復形のベースとして使えるのであれば、既存語彙としての容認度はかなり高いと判断される。単純反復形の存否を以って既存語／新造語の判断基準としたのは、この形式が日本語オノマトペの約4割以上を占める典型的な形態であること(国研 1964; 玉村 1979,1989; 大坪 1989; Oda 2000)がその理由である。さらに、単純反復形では反復回数に厳格な制限が伴い(那須 2001)、常に2フットからなる定型構造(二脚架鋳型 bipodic template)を構成する性質が見られるなど(Poser 1990)、より保守的な性格が備わっているため、既存語彙であるかどうかの判別に適している。

なお、KTS(1996)ですでに部分反復形が掲載されているもの(waha-, ihi-, ehe-, aha-, oho-, uhu-)については単純反復形を形成できなくても既存語として判断した。

上述の手続きによって[資料1]の語幹を検査した結果、全393項目中113項目が既存形としての条件に適合した。他方、これに適合しない残りの280項目は新造形として位置づけられる。以下にいくつか具体例を挙げておく。

(4) 既存／新造の別 (( )内は項目数)

- ・既存(113) peta-, basa-, turu-, doro-, koto-, guru-, supa-, zuru-, mera-, nuru-, wasa-, yoro-, huwa- など
- ・新造(280) piru-, bago-, tuta-, dopa-, kuha-, gug<sup>y</sup>u-, sipi-, zuga-, mug<sup>y</sup>u-, noho-, wata-, yaha-, hug<sup>y</sup>a- など

既存の語幹は「ペタペタ、バサバサ」など既存の単純反復形を作れるが、新造形を反復した「ピルピル、バゴバゴ」などの形は一般に馴染みが薄く、KTS(1996)にも掲載されていない。以下本稿では上に示した280項目の新造語幹に焦点を当て、その音韻構造の特徴について探っていく。

### 3.2. 新造語幹の音韻構造

新造形に特筆すべき性質として、既存形には見られない以下のような独特の音韻構造が含まれていることが指摘できる。第一に、いくつかの新造形において有声化原則に対する違反が見られることが挙げられる。オノマトペ語幹の有声化は(5)の原則に沿って起こるが(Hamano 1998; 那須 1999), 新造形の中にはこの原則に従わないパターンが見られる。たとえば(4)に例示したもののうち /bago-, gug<sup>y</sup>u-, zuga-/ は二つの有声阻害音を含み、原則(5)に合わない構造となっている。

(5) 有声化の原則(単一性の原則)

有声阻害音は一語幹につき一箇所には現れない。

第二に、語中 [p] 音の現れ方に一般的でないパターンが見られる。那須(1999)が明らかにしているように、語中の [p] 音(語幹の第二子音の位置にある [p])はその語幹の頭子音が有声阻害音である場合には同時に有声化され(二重有声化), (5)の原則に対する唯一の例外となる(例: supa → zuba)。しかし、新造形の中には語頭子音が有声阻害音であるにも関わらず二重有声化を起こさない /dopa-/ のようなパターンが見つかる。第三に、口蓋化子音の分布に関して例外的なパターンが起きている。Mester & Itô(1989)はオノマトペ語幹の口蓋化に次の原則が作用することを明らかにしている。

(6) 口蓋化の原則

- a. 舌頂音が含まれる語幹では舌頂音が優先的に口蓋化される。(例: /kata/ → katʰa, \*kʰata)

- b. 舌頂音が含まれない語幹では左端の子音が口蓋化される。(例：/poko/ → p<sup>ʷ</sup>oko, \*pok<sup>ʷ</sup>o)

だが、/gug<sup>ʷ</sup>u-, mug<sup>ʷ</sup>u-, hug<sup>ʷ</sup>a-/などの新造形では(6b)の原則に反する形で口蓋化が生じている。これらの語幹には舌頂音がないので左端の子音が口蓋化の対象となるはずだが、原則に反して第二子音が口蓋化されている。

以上概観したように、新造形は単純反復形を構成できないだけでなく、これまでの研究で明らかにされてきた音韻上の原則に反する構造を持っている。しかしながら、新造形の音韻構造が全ての側面にわたってこうしたアウトローな性格を備えているわけではない。新造形の構造を精密に観察すると、いかに新奇な形式であろうとも、ある部分では日本語の一般的な音韻原則に則った構造を有している様子が垣間見られる。そうした側面のひとつとして、以下では新造語幹の第一音節に含まれる子音と母音の分布に注目して分析を進める。

#### 4. 第一音節の分節構造

##### 4.1. 子音

新造語幹の音韻構造には既存語幹との性質の異同をめぐって特徴的な点が多々あるが、わけても第一音節の分節構造には注目すべき顕著な特徴が観察される。(7)に示すのは、新造語幹の第一音節に含まれる子音(以下 C<sub>i</sub>)とその数である。これを見ると、/b, d, z, g, k/などの特定の子音に数が集中していることに気づく。

##### (7) 新造語幹第一音節の子音(C<sub>i</sub>)

p	b	m	w	t	d	s	z	r	n	y	k	g	h	N	φ	合計
9	29	11	3	13	22	14	29	2	11	1	21	54	16	3	42	280

数の上では頭子音を持たない形/φ/が最多だが、これは漫画という表現形式に独特な性質を反映した分布だと考えられる。漫画では、笑いの場面においてほぼ常にとってよいほど「アハハハ」など頭子音を欠いた笑い声専用のオノマトペが頻出する。また、「ウググ」のような登場人物のうなり声を表象するタイプの形式も多い。これらのオノマトペは周囲の音響や動作の様態を表す表現というよりも、むしろ登場人物の台詞の一部として機能している。台詞が描画と同じく漫画での重要な表現手段であることを考慮すると、頭子音を欠いた語幹を含むオノマトペ表現が多いことはある種自然な結果だと言える。したがって、頭子音を持たない形の多さに関しては漫画という表現形式に特有の事実と見るべきであろう。

新造形式の特徴は、むしろ頭子音が存在する語幹にこそ見出される。新造語幹の第一音節の子音として最も多く現れたのは/g/であり、以下(8)に示す順となっている。(8)で網掛けを施してある子音は20項目以上の数が把握された出現数の多い子音である。

#### (8) C<sub>1</sub>の種類と数

$\bar{g} > \bar{b}, \bar{z} > \bar{d} > \bar{k} > h > s > t > m, n > p > w, N > r > y$

新造語幹におけるC<sub>1</sub>の特徴を明確に浮き彫りにするためには、一般に認知された既存の形式との異同を探る必要がある。Hamano(1998)は浅野(1978)に掲出されている実在のオノマトベ語彙の音配列構造を分析し、2音節語幹のC<sub>1</sub>に現れる子音の種類と数に関して(9)に示す序列が見られることを報告している([ ]内の数値は当該の子音をC<sub>1</sub>に含む2音節語幹の数)<sup>3</sup>。

#### (9) 実在語彙のC<sub>1</sub> (Hamano 1998:41)<sup>4</sup>

$\bar{g}[48] > p[44] > \bar{b}[41] > \bar{k}[36] > s[28] > h[26], t[26] > m[24] > \bar{z}[23] > \bar{d}[19] > n[18] > y[6] > w[4] > r[0]$

(8)と(9)の対比からは、次のような注目すべき事実が窺える。まず、新造語幹に多く現れるC<sub>1</sub>のうち/g, b, k/は実在語彙のC<sub>1</sub>としても多く現れている。その一方で、/z, d/の二つの子音は実在語彙のC<sub>1</sub>ではさほど多くは見られないのに、新造語幹になるとC<sub>1</sub>の位置に現れやすくなっているのが分かる。ここに/g, b, k/の群と/z, d/の群の顕著な違いを見出すことができる。

/g, b, k/が既存語幹・新造語幹のいずれにおいてもC<sub>1</sub>の位置に多く現れるということは、これらの子音が既存語幹／新造語幹の別を問わずオノマトベ全般にわたり語幹のC<sub>1</sub>としてごく一般的なものであることを示している。また、これらの子音が新造語幹においても多数見られるということは、新造オノマトベでも既存のオノマトベにかなり敷衍した音韻構造が作られやすいことを示している。すなわち、新造オノマトベの音韻構造は考えられているほど奇抜な性質を持っているわけではなく、むしろ語幹のC<sub>1</sub>の選好に関しては既存オノマトベ構造に見られる一般的な傾向に準拠しているのである。

翻って、/z, d/の現れ方に関しては明らかに新造語幹に特有の性質を見出すことができる。実在語彙での阻害子音の分布(9)ではC<sub>1</sub>の調音位置の序列に概略[舌面音>唇音>舌頂音]<sup>5</sup>の順があり、舌頂音の出現頻度は他二者に比べてかなり下位にある。ところが、新造語幹(8)では一転して舌頂音/d, z/がC<sub>1</sub>として選択される頻度が高まっている。このことから、音韻構造の面において新造語幹に特有のパターンがあるとすれば、まずはC<sub>1</sub>に位置する舌頂音/d, z/の存在にその特徴を求めることができそうである。この点については母音との関わりを通じて第5節で詳しく議論する。

#### 4.2. 母音

続いて第一音節での母音(V<sub>1</sub>)の分布について見たい。新造語幹280項目の中からV<sub>1</sub>を持たない形式/Ngu-, Ngi-, Nnu-/を除くと、残り277項目でのV<sub>1</sub>の分布は次のようであった。



(10) 新造語幹第一音節の母音(V<sub>1</sub>)

i	34	(12.3%)
e	15	(5.4%)
a	63	(22.7%)
o	50	(18.1%)
u	115	(41.5%)
合計	277	

一見して分かるように新造語幹には V<sub>1</sub> に /u/ が現れる形式が際立って多い。この点は実在語彙での V<sub>1</sub> の分布と対照させるとさらにはっきりする。以下に示すのは Hamano(1998)が報告している実在語彙での V<sub>1</sub> の現れ方である。

(11) 実在語彙での V<sub>1</sub> (Hamano 1998:47)

i	65	(17.8%)
e	42	(11.5%)
a	70	(19.1%)
o	97	(26.5%)
u	92	(25.1%)
合計	366	

実在語彙では必ずしも /u/ だけが突出して多いわけではない。(10)と(11)での /u/ の占める割合を比較してみると、新造語幹(10)の V<sub>1</sub> では /u/ が41.5%を占めている一方で実在語彙(11)の V<sub>1</sub> では /u/ は25.1%に留まっている。このことから、V<sub>1</sub> に /u/ が現れやすいのは明らかに新造語幹に特有の性質だと見ることができる。

この点について、語幹のタイプ(新造：実在)の違いと V<sub>1</sub> での /u/ の現れ方(/u/ : /u/ 以外)との間に相関関係があるかどうか調べるために、独立性の検定( $\chi^2$  検定)を行った。(10)(11)のデータから、新造／実在のそれぞれの形式に関して V<sub>1</sub> が /u/ である項目数とそれ以外の母音である項目数を分別すると次のクロス表が得られる。

(12) クロス表

	新造	実在	計
V <sub>1</sub> = /u/	115	92	207
V <sub>1</sub> ≠ /u/	162	274	436
計	277	366	643

ここで「語幹のタイプの違いと母音 /u/ の現れ方は互いに独立である(相関がない)」との帰無仮説を立てて $\chi^2$ 検定を行うと $\chi^2$ 値は19.3786であり、自由度1・危険率1%以下の水準で有意差が確認され( $\chi^2=19.3786, df=1, p<.01$ )、帰無仮説が棄却される結果となった。すなわち  $V_1$  に /u/ が多く現れることと語幹のタイプの違い——新造形式か実在形式か——の間には有意な相関が認められ、 $V_1$  に /u/ が突出して多く現れることが新造形式での顕著な特徴であることが確認できた<sup>6</sup>。

新造語幹と /u/ との相関は、本研究で得られた既存語幹(cf.(4))での母音の現れ方との対比においても読み取れる。以下に示すのは既存語幹113項目での母音の分布であるが、既存語幹では /u/ は /a/ と同程度の現れ方であり、新造語幹に見るような突出した数にはなっていない。

(13) 既存語幹の  $V_1$

i	17	(15.0%)
e	4	(3.6%)
a	32	(28.3%)
o	29	(25.7%)
u	31	(27.4%)
合計	113	

また、先ほどの場合と同様の手法で語幹のタイプ(新造：既存)と母音 /u/ の現れ方との相関について $\chi^2$ 検定を行ったところ、この場合にもやはり自由度1・危険率1%以下の水準で有意な差が見られた( $\chi^2=6.7959, df=1, p<.01$ )。これらの結果から、前節で論じた  $C_1$  での舌頂子音の多さという特徴に加え、/u/ が  $V_1$  として選好されやすいことが新造語幹に見られるもう一つの特徴として指摘できる。

## 5. 無標構造の形成

前節までの検証を通じて、新造語幹ではその第一音節の構造に既存語幹には見られない次のような特徴があることが明らかになった。第一に、 $C_1$  に現れる子音に既存語幹とは異なる特徴が見られ、新造語幹では既存語幹に比べて舌頂子音 /d, z/ が  $C_1$  の位置に現れやすくなっていることが確認された。第二に、母音に関しては  $V_1$  に /u/ が現れる形式が突出して多く、既存語幹での母音の現れ方との間に有意な差が見られた。これらの二つの特徴を踏まえた上で、 $C_1$  と  $V_1$  の関わりに注目した分析を行うとさらに興味深い事実が捉えられる。

### 5.1. 無標結合構造

新造語幹の第一音節に関して、子音と母音の組み合わせおよび、それぞれの組み合わせが現れた数を整理したのが以下の表である<sup>7</sup>。

(14) C<sub>1</sub> と V<sub>1</sub>

	p	b	m	w	t	d	s	z	n	r	y	k	g	h	∅	計
i	3	4	0	-	0	0	2	2	2	0	-	2	8	2	9	34
e	1	2	0	-	0	2	0	0	0	0	-	2	6	2	0	15
a	2	8	1	3	1	4	0	4	2	1	1	6	16	3	11	63
o	1	6	3	-	6	14	1	5	4	0	0	2	2	2	4	50
u	2	9	7	-	6	2	11	18	3	1	0	9	22	7	18	115
計	9	29	11	3	13	22	14	29	11	2	1	21	54	16	42	277

素数の一覧だけでは特定の傾向がはっきりと掴みにくいので、新造語幹の C<sub>1</sub> として比較的多く現れる /b, d, z, g, k/<sup>8</sup> に焦点を絞って各母音が占める割合を次のように整理すると、母音との組み合わせに関して舌頂子音と非舌頂子音との間に顕著な非対称性を見出すことができる。

(15) C<sub>1</sub> = /b, d, z, g, k/ における各母音の占める割合 (単位は%)

V <sub>1</sub> \	b	d	z	g	k
i	13.8	0.0	6.9	14.8	9.5
e	6.9	9.1	0.0	11.1	9.5
a	27.6	18.2	13.8	29.6	28.6
o	20.7	63.6	17.2	3.7	9.5
u	31.0	9.1	62.1	40.8	42.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

子音と母音の組み合わせに関して数量的に特段目立つ分布が観察されるのは、V<sub>1</sub> が /a/ および /u/ の場合である。V<sub>1</sub> に /a/ が位置する構造では /b, g, k/ などの非舌頂音が C<sub>1</sub> に比較的多く現れる一方で舌頂音の占める割合は少ない。ところが、V<sub>1</sub> に /u/ が位置する構造ではこの関係が全く逆転しており、非舌頂音に比べて舌頂音である /z/ の出現率が飛躍的に高まる。

ここで想起されるのは、先に第4節の議論で明らかになった事実——すなわち、新造語幹の第一音節での C<sub>1</sub> および V<sub>1</sub> の現れ方に見る次の特性である。まず C<sub>1</sub> に関しては、非舌頂音 (/b, g, k/) が既存のオノマトペ語幹でも C<sub>1</sub> に立ちやすいのに対して、舌頂音 (/d, z/) は明らかに新造語幹の C<sub>1</sub> に偏って現れやすいという特徴が見られた。また V<sub>1</sub> については、新造語幹に /u/ が突出して多く現れるという顕著な特徴が見られた。これらの事実から言えるのは、新造語幹においてはその C<sub>1</sub> として舌頂音 /d, z/ が、V<sub>1</sub> としては /u/ が、それぞれ第一音節の分節として選好されやすい傾向にあることである。これらの事実と(15)に見た事実とをつき合わせると、新造語幹

の第一音節では量的に無標な要素どうしが結合した構造が作られやすいことが分かる。すなわち、新造語幹に偏って現れやすい /z/ が C<sub>1</sub> に位置する構造では、これまた新造語幹において量的に他を圧倒して現れる母音 /u/ が V<sub>1</sub> として現れやすいのである。

興味深いのは、数の上で一般的な要素同士が結合した /z+u/ 構造が、音韻論的な性格においても無標な要素どうしの結合した構造だと言える点である。まず、子音の中でも /z/ のように舌頂部を調音位置とする子音は多くの音韻過程において一般に無標な性質を持ちやすい (Steriade 1987a,b; Paradis & Prunet 1991a,b; Cho 1991; Davis 1991; Shaw 1991; Mester & Itô 1989; Itô & Mester 1996)。素性階層において舌頂位置だけが不完全指定を受けたり (Paradis & Prunet 1991b; Itô & Mester 1996)、本来ならば音節構造上有標であるはずの子音クラスターを幅広く構成できるなど (Steriade 1982; Yip 1991)、一般に舌頂子音には他の子音とは違って透明な (目立たない、ゆえにデフォルトになりやすい) 性質が見られる。また母音 /u/ に関しては、よく知られているように外来語形成の際に挿入母音として最もよく選ばれる母音であり (国研 1990)、外来語以外の音韻過程においても予測可能なデフォルト母音であることが多い (Itô & Mester 1996)。つまり、新造オノマトペの第一音節に現れやすい /zu/ という音節構造は、量的にも質的にも無標な項目どうしを結合させた性質を備えているのである (無標結合構造)。

## 5.2. 母音の相補分布

ところで、新造語幹の C<sub>1</sub> に現れやすい舌頂音としては上に論じた /z/ だけでなく、/d/ もまたこの位置に現れやすいことが (7) (8) から分かる。ただし、/d/ は母音との組み合わせにおいて明らかに /z/ とは異なる振る舞いを見せている。(16) の表は (15) から関連する部分を抜粋して再掲したものだが、これを見ると /d/ では /u/ とではなく /o/ との結合が圧倒的に起こりやすいことが分かる。

(16) 舌頂子音と母音 (単位は%)

	d	z
i	0.0	6.9
e	9.1	0.0
a	18.2	13.8
o	63.6	17.2
u	9.1	62.1
計	100.0	100.0

/d/ と /z/ では母音の現れ方が全く対照的である。/z/ において /u/ との組み合わせが著しく多いのに対して /d/ では /o/ との組み合わせの方が突出して多く、/u/ と /o/ はこれらの C<sub>1</sub> との組み合わせに関して相補的な分布を示している。先に (10) に示した事実に基づくと新造語幹では /u/

が V<sub>1</sub> における無標値であると言えるが、常に /u/ だけが無標値となるわけではない。(16)から窺えるとおおり、結合する C<sub>1</sub> のタイプによっては別の母音 /o/ が V<sub>1</sub> の無標値としての地位を獲得することもある。いわば /o/ は、新造語幹の V<sub>1</sub> にとって /u/ に次ぐ「もうひとつの無標値」なのである。

C<sub>1</sub> が /d/ である新造語幹において V<sub>1</sub> に /o/ が選好されやすいのは、決して偶然の結果だとは考えられない。これと平行的な分布が外来語の挿入母音のシステム(17)にも観察されるからである。外来語においても、開音節化やクラスター分割に際して挿入される母音の無標値として二通りのパターンが併存する音韻構造が見られる。外来語の挿入母音としては一般的には /u/ が選ばれるが、舌頂閉鎖音 /t, d/ の直後に限っては /o/ が挿入母音になることがよく知られている(国研 1990)<sup>9</sup>。

#### (17) 外来語の挿入母音

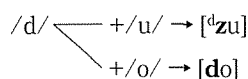
- a. /u/ : app[u](アップ), pab[u](パブ), hoom[u](ホーム), seeh[u](セーフ), bas[u](バス), hureez[u](フレーズ), kikk[u](キック), riig[u](リーグ), boor[u](ボール)
- b. /o/ : kyatt[o](キャット), gaad[o](ガード)

このことから、(16)に見る母音の分布も決して散発的な偶然ではなく、舌頂閉鎖音 /d/ の直後の V<sub>1</sub> として /o/ が著しく選好されやすいことには、何らかの音韻論的な要因が関わっていると推測される。

そのような音韻論的要因として考えられるのは日本語の拍体系に見られる次の性質である。周知の通り /t, d/ を含む拍では /u/ が後続すると破擦音化が起こり、その表層形は [tsu, dzu] という形になる。換言すると、後続母音の質によって先行子音が影響を受けてしまう点——すなわち破擦化の派生が起こる点がこの場合重要な特徴である。

外来語の形成過程では原語の子音の性質をより忠実に継承する働きが伴うが(Katayama 1998)、子音が /d/ である場合には、これに付随する挿入母音が /u/ であると、破擦化によって /d/ の持つ閉鎖音としての本来の特性が失われてしまう。加えて、日本語の拍体系では /d/ に /u/ が結合した構造と /z/ に /u/ が結合した構造とが中和してしまい、どちらも同じ形 [zu] になってしまう。これは「グッド(*good*) : グッズ(*goods*)」のようなペアを見るとよく分かる。‘good’ の外来語形において /u/ が挿入母音として選ばれると語末の /d/ が破擦化し、‘goods’ の外来語形である [gu<sup>d</sup>zzu] (グッズ) との対立が失われてしまう。一方、/d/ を含む音節の挿入母音として /o/ が付随する場合には破擦化の派生が起こらないので、子音 /d/ の特性が失われることはない (=18)。

#### (18) 破擦化と母音の関わり



上述のように、外来語での挿入母音の分布は日本語の拍体系の性質と密接な関わりを持つわけ

だが、これと軌を一にする分布が新造オノマトベの母音にも見られるということは、新たなオノマトベ形式が作られる場面においてもやはり同様の要因が関与していることを物語る。(16)の分布は  $V_1$  の現れ方が  $C_1$  のタイプによって相関的にコントロールされていることを示しており、 $C_1$  が /z/ である形式では一般的な無標値である /u/ が  $V_1$  に現れる一方で、 $C_1$  が /d/ である形式においては、子音の変化(破擦化)をもたらさない /o/ がもうひとつの無標値として選ばれていると見ることができる。

ただし、この議論に関して若干の注意を要するのは、外来語においてもオノマトベにおいてもごく稀に /d/ の特性を保ったまま /u/ が後続する構造が作られることである。たとえば「ドリーム(dream)」といった外来語に「ドリーム」のような異形式が見られたり、挿入母音の関わる事例ではないものの「ヒンズー教」という語では「ヒンドゥー教」といった形式が用いられたりすることもある。新造オノマトベに関しても、同様の例外的なパターンが僅かながら二例((16)の統計では9.1%)見られる。「ドウド、ドウル」の二つの語幹がそれである。

「ドゥ」は服部(1979)の用語を借りれば音韻体系の「あきま」に相当する拍であるが、見方によってはこの拍の子音を /d/ の異音としてではなく別個の音素 /d<sup>w</sup>/ として特立させる解釈もあり得る。もしそうであれば、「ドウド、ドウル」の語頭音節は /d<sup>w</sup>+u/ という構造として解釈されることになり、(16)の統計において /d+u/ 構造としては計上されなくなるので、実質的に「/d/ には /u/ が一切後続しない」とする結論が得られることになる<sup>10</sup>。

しかしながら、この解釈にはいくつか問題が指摘できる。第一に、/d<sup>w</sup>/ が独立の音素だとすると、この音素を含む構造が極めて稀にしか現れないという事実に対し、音素体系の経済性の観点から見て合理的な説明を与えることができない。実際、本研究で得られた資料でも僅かに二例だけであり、こうした周縁的なパターンに含まれる構造を音素として一般化できるかどうかは疑問である。第二に、/d<sup>w</sup>/ という構造に独立の音素としてのステイタスを認定した場合、今度は逆にこの構造が常に /u/ としか結合できない理由を求めるのが難しくなる。/u/ 以外の母音が結合した /\*d<sup>w</sup>a, \*d<sup>w</sup>i, \*d<sup>w</sup>e, \*d<sup>w</sup>o/ という拍構造を持つ語の実例は新奇な拍構造を許す外来語においてさえ見つかからないわけだが<sup>11</sup>、こうした結合制限の強すぎる音素を認定することもやはり経済的な分析とは言いがたい。第三に、仮に /d<sup>w</sup>/ を音素と解釈した上で「/d/ には /u/ が後続し得ない (= /u/ が後続するのは  $C_1$  が音素 /d<sup>w</sup>/ である場合に限る)」と考えても、ではなぜ  $C_1$  が /d/ である構造において  $V_1$  に /o/ が多く現れるのかという、そもそもの疑問自体に明確な説明が与えられるわけではない。

以上を踏まえると、ごく稀な音韻構造の解釈のために音韻的制限の強い特殊な音素 /d<sup>w</sup>/ を想定することには疑問が多いことから、「ドゥ」の頭子音のステイタスはあくまで通常の音素 /d/ と同様に捉えた方がよさそうである<sup>12</sup>。すなわち「ドゥ」は /d/ を頭子音に持ちつつも、[dzu]への破擦化が起きる /d+u/ 構造において例外的にこの規則が適用されないがゆえにもたらされた拍だと考えられる。理論的な用語を借りるならば、「ドゥ」の形成は  $C_1$  の基底表示の違い(音素 /d/ か音素 /d<sup>w</sup>/ か)によるのではなく、同一基底表示 /d/ への破擦化規則(/d+u/ → [dzu])の不履行という角度から、すなわち、/d+u/ 構造で起こる破擦化規則の適否の違いによって起こるも

のであると解釈できる。

## 6. まとめと課題

### 6.1. 無標値の表出

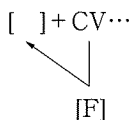
本稿では、漫画に用いられる新たなオノマトペ形式を集め、その語幹の音韻構造について検証し、第一音節の分節構造に以下のような特有の性質が見られることを明らかにしてきた。

第一に、既存語幹に比べ新造語幹の  $C_1$  では舌頂音 /d, z/ が現れやすいことを見た。むろん素数の上では非舌頂子音も多いが、非舌頂音 /g, b, k/ が既存オノマトペでも現れやすいのに対し、舌頂音 /d, z/ は明らかに新造語幹でのみ多く現れる点で顕著である。第二に、新造語幹の  $V_1$  として /u/ が圧倒的に多く現れることおよび、実在語彙や既存語幹での現れ方との間に有意な差があることが確認された。第三に、直前の舌頂子音の性質により /u/ と /o/ の間で相補的な分布が起こっている様子を明らかにした。とりわけ  $C_1$  が /d/ である語幹においてのみ /u/ ではなく /o/ が突出して多く現れる事実を指摘し、その背景に /d+u/ 構造での破擦化という日本語一般に見られる異音化のプロセスが関わっていることを論じた。

新造オノマトペの第一音節に現れやすい舌頂子音 /d, z/ および母音 /u/ は、一般語彙では無標値として振る舞う分節としてよく知られているが、こうした一般語彙での無標値が新造オノマトペにおいても量的に無標な地位を占めていることは大変興味深い事実である。音象徴のことはあるオノマトペの音韻構造はしばしば一般語彙の音韻構造とはかけ離れた性質を示すと言われるが、オノマトペの音韻構造は必ずしも全ての面にわたってそうした異例な性質を持っているわけではない。むしろ、語幹の第一音節の分節として子音・母音の無標値が選好されやすい点や、相補分布環境での母音の選択が日本語の拍体系におけるごく一般的な制約によって制御されていることから、一般語彙に見られる既存の音韻的枠組みが新造オノマトペの形成場面においても深く関わっている様子が見て取れる。

新造オノマトペにおける母音 /u/ の無標性をめぐっては、これと関わりのある現象が他にも指摘できる。部分反復オノマトペの中には笑い声を表す定型的な表現として「あははは、いひひひ、うふふふ、えへへへ、おほほほ」などの形式があるが、これらの語頭に現れる母音の質はそれ以降の構造に含まれる母音から予測可能であり、また、語頭の母音を除いた形式（「ははは」など）が適格な独立形態であることから、その構造を次の拡張規則によって捉えることができる (Nasu 2003)。

#### (19) 拡張



語頭母音  $V_1$  に相当するスロットが空所で示されているように、 $V_1$  はそれ自身固有の値を持っておらず、その値は後続の母音の素性が拡張することで自動的に決定される。ところが、笑いの部

分反復オノマトペの中には(19)の方略に拠らない次のような語形も見られる。これらのうちいくつかは本研究で検索した新造オノマトペにも実際に含まれている。

(20) うははは、うひひひ、うへへへ、うほほほ、うひゃひゃひゃ、うひょひょひょ

注目すべきはこうしたパターンの  $V_1$  がおしなべて /u/ であって、そのほかの母音が  $V_1$  に位置した「\*あほほほ、\*いふふふ、\*えははは、\*おひひひ」といったパターンが一切出てこないことである。また(20)のパターンでは、 $V_1$  の値は明らかに後続のCV部分からの素性拡張(19)とは無関係に決まっている。つまり、空所である  $V_1$  は特定の構造記述を必要としない無標値によって充足されていると考えられるわけだが、このときに  $V_1$  に /u/ だけが現れるということは、この母音が空所充足のデフォルト値として機能していることを物語っている。

## 6.2. 今後の課題

本稿では、新造語幹の第一音節の構造に焦点を当ててその諸特徴を明らかにしてきたが、当然ながら第一音節以外の構造からも新造語幹に特有の性質が見出される可能性は残されている。あるいは、部分反復形以外の新造オノマトペを観察すればさらに別の角度から新たな言語事実が発見される可能性もあるが、これらの点については今後の課題として別途機会を改めて考察することにした。また、本稿では専らデータから読み取れる事実に基づいてオノマトペの音韻構造について議論してきたわけだが、従来重ねて指摘されているように、オノマトペの音韻構造は多分に音象徴機能との関わりが深いため、分節の無標性といった形式的な特徴だけでなく、音象徴効果に関わる要求が音韻構造の形成に何らかの形で影響している可能性もある。こうした点も今後の考察の余地として残されている。

### 注

- 1 漫画のオノマトペを分析することに対しては、たとえば金田一(1978)が「漫画などに見られるような品のないものは退けていい」と述べるなど、否定的な評価が与えられることがある。しかしながら、漫画に現れる新奇なオノマトペ(新たに作り出された形式)に現れる音韻構造の特徴を析出することによって、オノマトペの生産的な側面——新たに語を作り出す場面においてどのような音韻的なしくみが働いているかを明らかにすることができる。
- 2 文学作品や新聞記事などで実際に用いられている例からの引用だけで約3500以上の語形が収められている。
- 3 Hamano(1998)の分析の拠所である浅野(1978)の辞典には約1600語のオノマトペが掲載されている。このうち反復形のベースとして働く2音節語幹の数は366種類である。Hamano(1998)はこれらの語幹の分節構造を分析している。(9)はその分析結果を引用したものである。Hamanoが分析した2音節語幹の詳細についてはHamano(1998:221-237)所収の“Appendix B”を参照。なお本文中でこれらを「实在語幹／实在語彙」と称しているのは、辞典(浅野1978)に掲載されている以上は实在の語彙として一般に認知された形であると判断されるためである。



- 4 (9)での網掛けは(7)および(8)で網掛けを施した子音に対応する。また、 $C_1 = /O/$  は本論に述べた理由から除いてある。
- 5 素性階層理論(Sagey 1986; Halle 1992; Claments & Hume 1995など)では口腔の調音位置の表示は調音者(articulator)側の部位によって区別する。両唇音・唇歯音は唇音(labials)に属し、歯間音・歯茎音・後部歯茎音など舌尖や舌端が関わる子音群は舌頂音(coronals)にまとめられ、舌面(舌背)の関わる硬口蓋音・軟口蓋音・口蓋垂音は舌面音(dorsals)にまとめられる。したがって本稿で頻出する「舌頂音」には /t, d, s, z, n, r, y/ が対応する。
- 6 ちなみに他の母音に関しても同様の手法で $\chi^2$ 検定を行ったところ、/i, a, o/では有意差は認められなかったが/e/については危険率1%以下の水準で有意差が確認された( $\chi^2=7.1677$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。ただし、/e/と/u/では有意差をもたらす性質が異なっていると考えられる。/e/は新造形式での割合が最も低いが、この傾向は実在形式でも同様であり、他の母音に比べて有意に低い。このことは、日本語のオノマトベでは/e/の出現率がもともと低い(Hamano 1998)という事実と関わっている(この指摘は松井理直氏(私信)による)。すなわち、/e/に見られる有意差はオノマトベの母音として/e/が現れにくいことによるものであり、/u/に見られるような語幹のタイプの違いに起因するものではないと言える。
- 7 /N/を $C_1$ に持つ形式(3項目)には母音が含まれないので除いてある。結果、(14)の総数は277項目である。
- 8 /b, d, z, g, k/に焦点を当てることの論拠については4.1節(8)の議論を参照。
- 9 挿入母音として/i/が入る例(キャッチ, チャージなど)はここでの議論に直接関わらないので触れない。
- 10 この点は匿名査読者の指摘による。
- 11 むろん、たとえば'dwarf'という語に由来する外来語を/d<sup>w</sup>aahu/(表記するのであれば「ドワーフ」か)のように発音してできないことはないが、「当該の発音ができること」と「音素として認定し得ること」は別問題であろう。
- 12 [資料1]では「ドゥ」拍に対して/d<sup>w</sup>u/という表記を用いているが、これは/d<sup>w</sup>/を音素として認定しているからではなく、破擦化を起こす/d+u/構造との区別を示すための便宜的なものに過ぎない。(/d/に対し破擦化が起らないまま/u/が結合した例外的なパターンであることを明示するためである。)

#### 参考文献

- 浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店。  
 天沼寧編(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版。  
 大坪併治(1989)『擬声語の研究』明治書院。  
 金田一春彦(1978)「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子編(1978), 3-25。  
 国立国語研究所編(1964)『分類語彙表(国立国語研究所資料集6)』秀英出版。  
 国立国語研究所編(1990)『外来語の形成とその教育(日本語教育指導参考書16)』大蔵省印刷局。  
 玉村文郎(1979)「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大國文』9, 208-216, 大谷女子大学国文学会。  
 玉村文郎(1989)「語形」玉村文郎編『日本語の語彙・意味(上)(講座日本語と日本語教育6)』23-51, 明治書院。  
 那須昭夫(1999)「オノマトベにおける有声化と[p]の有標性」『音声研究』3(3), 52-66, 日本音声

- 学会。
- 那須昭夫(2001)「重複形オノマトベの韻律構造」『大阪外国語大学論集』25, 115-125, 大阪外国語大学。
- 服部四郎(1979)「国語の音韻体系」『音韻論と正書法』119-200, 大修館書店。
- Broselow, Ellen & John McCarthy (1983-84) A theory of internal reduplication, *The Linguistic Review* 3, 25-88.
- Cho, Young-Mee (1991) On the universality of the coronal articulator, In Paradis & Prunet, eds. (1991a), 159-179.
- Clements, George & Elizabeth Hume (1995) The internal organization of speech sounds, In J. Goldsmith (ed.) *The handbook of phonological theory*, 245-306, Oxford: Blackwell.
- Davis, Stuart (1991) Coronals and the phonotactics of nonadjacent consonants in English, In Paradis & Prunet, eds. (1991a), 49-60.
- Halle, Morris (1992) Phonological features, In W. Bright (ed.) *International encyclopedia of linguistics* 3, 207-212, Oxford: Oxford University Press.
- Hamano, Shoko (1998) *The sound-symbolic system of Japanese*, Stanford, Tokyo: CSLI Publications and Kurocio.
- Itô, Junko & Armin Mester (1996) Stem and word in Sino-Japanese, In Takashi Otake & Anne Cutler (eds.) *Phonological structure and language processing: Cross-linguistic studies*, 13-44, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, & Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of iconic expressions in Japanese*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Katayama, Motoko (1998) *Optimality theory and Japanese loanword phonology*, Santa Cruz: University of California Ph.D. dissertation.
- McCarthy, John & Alan Prince (1986) *Prosodic morphology*, Waltham: Brandeis University ms.
- McCarthy, John & Alan Prince (1996) *Prosodic morphology 1986*, Amherst, New Brunswick: University of Massachusetts, Rutgers University ms.
- Mester, Armin & Junko Itô (1989) Feature predictability and underspecification: Palatal prosody in Japanese mimetics, *Language* 65, 258-293.
- Nasu, Akio (2003) Reduplicants and prefixes in Japanese onomatopoeia, In Takeru Honma et al. (eds.) *A new century of phonology and phonological theory*, 210-221, Tokyo: Kaitakusha.
- Oda, Hiromi (2000) *An embodied semantic mechanism for mimetic words in Japanese*, Bloomington: Indiana University Ph.D. dissertation.
- Paradis, Carole, & Jean-François Prunet, eds. (1991a) *The special status of coronals: Internal and external evidence (Phonetics and phonology 2)*, San Diego: Academic Press.
- Paradis, Carole, & Jean-François Prunet (1991b) Introduction: Asymmetry and visibility in consonant articulations, In Paradis & Prunet, eds. (1991a), 1-28.
- Poser, William (1990) Evidence for foot structure in Japanese, *Language* 66, 78-105.
- Saygey, Elizabeth (1986) *The Representation of features and relations in nonlinear Phonology*, Cambridge, MA: MIT Ph.D. dissertation.
- Shaw, Patricia (1991) Consonant harmony systems: The special status of coronal harmony, In Paradis & Prunet, eds. (1991a), 125-157.

- Steriade, Donca (1982) *Greek prosodies and the nature of syllabification*, Cambridge: MIT Ph.D. dissertation.
- Steriade, Donca (1987a) Locality conditions and feature geometry, *NELS* 17, 595–618, Amherst: GLSA, University of Massachusetts.
- Steriade, Donca (1987b) Redundant values, *CLS* 23, 339–362, Chicago: Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- Yip, Moira (1991) Coronals, consonant clusters, and the coda condition, In Paradis & Prunet, eds. (1991a), 61–78.

#### 作品一覧

- [1] 『CAT'S EYE』(北条司, 集英社)
- [2] 『こどものおもちゃ』(小花美穂, 集英社)
- [3] 『ゴルゴ13』(さいとう・たかを, リイド社)
- [4] 『SLUM DUNK』(井上雄彦, 集英社)
- [5] 『大日本天狗党絵詞』(黒田硫黄, 講談社アフタヌーン KC)
- [6] 『ときめきトゥナイト』(池野恋, 集英社)
- [7] 『ドラゴンボール』(鳥山明, 集英社)
- [8] 『NARUTO』(岸本育史, 集英社)
- [9] 『ホットロード』(紡木たく, 集英社)
- [10] 『めぞん一刻』(高橋留美子, 小学館)
- [11] 『MONSTER』(浦沢直樹, 小学館)
- [12] 『YAIBA』(青山剛昌, 小学館)
- [13] 『山田太郎ものがたり』(森永あい, 角川書店)
- [14] 『闇のパープル・アイ』(篠原千絵, 小学館)
- [15] 『幽遊白書』(富樫義博, 集英社)
- [16] 『有閑倶楽部』(一条ゆかり, 集英社)
- [17] 『りびんぐゲーム』(星空ちもる, 小学館)
- [18] 『ワンダースリー』(手塚治虫, 秋田書店)

#### 付記

本稿は、科学研究費補助金の助成を受けた研究課題「プロソディの多様性と普遍性に関する総合的研究」(基盤研究(B)(1), 課題番号14310222) および、同研究課題「オノマトベの韻律計算機構の獲得と変異に関する研究」(若手研究(B), 課題番号16720089) による研究成果の一部をまとめたものである。本稿の作成にあたり二名の匿名査読者からそれぞれ有益な批判とコメントを頂いたほか、統計検定について神戸松蔭女子学院大学の松井理直氏より助言を頂いた。これらは本研究をまとめる上で極めて大きな示唆を与えるコメントであり、その批判・助言を参考に再度の修整を加えた。ただし、言うまでもなく本稿でのデータの分析や解釈ならびに考察に誤りがあるとすれば、それらは全て筆者自身の責に帰すべきものである。

(投稿受理日：2004年 5 月12日)

(改稿受理日：2004年 8 月18日)

---

那須 昭夫 (なす あきお)

大阪外国語大学外国語学部日本語講座

562-8558 箕面市粟生間谷東8-1-1

nasu@osaka-gaidai.ac.jp

[資料1] 語幹の音韻形式

- ・ 語頭2音節の構造を訓令式アルファベットで示す。
- ・ 新造語幹には下線を付してある。

piti-	lisi-	piri-	piro-	piru-	piki-	piku-	peta-	pere-	pero-
pata-	pas <sup>y</sup> u-	para-	paka-	pupa-	pusu-	puri-	pura-	puru-	puku-
<u>puha-</u>	<u>p<sup>y</sup>ara-</u>	<u>p<sup>y</sup>oro-</u>	<u>biba-</u>	<u>bisi-</u>	<u>biyo-</u>	<u>biri-</u>	<u>biro-</u>	<u>biki-</u>	<u>beki-</u>
<u>behe-</u>	<u>babi-</u>	<u>bati-</u>	<u>bata-</u>	<u>basa-</u>	<u>bas<sup>y</sup>a-</u>	<u>bas<sup>y</sup>u-</u>	<u>bari-</u>	<u>bara-</u>	<u>baro-</u>
<u>baru-</u>	<u>baki-</u>	<u>bako-</u>	<u>baga-</u>	<u>bago-</u>	<u>bah<sup>y</sup>u-</u>	<u>bowa-</u>	<u>bos<sup>y</sup>u-</u>	<u>boro-</u>	<u>boru-</u>
<u>boki-</u>	<u>boko-</u>	<u>bogo-</u>	<u>bupa-</u>	<u>bubi-</u>	<u>buba-</u>	<u>hubo-</u>	<u>buwa-</u>	<u>bus<sup>y</sup>u-</u>	<u>buyo-</u>
<u>buri-</u>	<u>buro-</u>	<u>buru-</u>	<u>buhi-</u>	<u>buha-</u>	<u>b<sup>y</sup>uru-</u>	<u>b<sup>w</sup>obo-</u>	<u>b<sup>w</sup>oro-</u>	<u>misi-</u>	<u>mera-</u>
<u>mawa-</u>	<u>mowa-</u>	<u>mon<sup>y</sup>o-</u>	<u>moga-</u>	<u>mupi-</u>	<u>muri-</u>	<u>mugi-</u>	<u>muge-</u>	<u>mug<sup>y</sup>u-</u>	<u>muho-</u>
<u>muhu-</u>	<u>wata-</u>	<u>wat<sup>y</sup>a-</u>	<u>wasi-</u>	<u>wasa-</u>	<u>waha-</u>	<u>tiri-</u>	<u>tara-</u>	<u>taha-</u>	<u>topa-</u>
<u>tote-</u>	<u>tota-</u>	<u>toru-</u>	<u>toka-</u>	<u>toho-</u>	<u>tute-</u>	<u>tuta-</u>	<u>tura-</u>	<u>turu-</u>	<u>t<sup>y</sup>aki-</u>
<u>t<sup>y</sup>oro-</u>	<u>t<sup>y</sup>udo-</u>	<u>t<sup>y</sup>uru-</u>	<u>t<sup>w</sup>uru-</u>	<u>dehe-</u>	<u>deha-</u>	<u>data-</u>	<u>dado-</u>	<u>dara-</u>	<u>daha-</u>
<u>dah<sup>y</sup>a-</u>	<u>dopa-</u>	<u>do<sup>y</sup>a-</u>	<u>do<sup>y</sup>o-</u>	<u>dota-</u>	<u>dode-</u>	<u>doda-</u>	<u>dosa-</u>	<u>doza-</u>	<u>dozu-</u>
<u>doyo-</u>	<u>doro-</u>	<u>doru-</u>	<u>dor<sup>y</sup>u-</u>	<u>doka-</u>	<u>doga-</u>	<u>dogo-</u>	<u>dohe-</u>	<u>doha-</u>	<u>doh<sup>y</sup>u-</u>
<u>d<sup>w</sup>udo-</u>	<u>d<sup>w</sup>uru-</u>	<u>sipi-</u>	<u>sipa-</u>	<u>sawa-</u>	<u>sara-</u>	<u>supa-</u>	<u>supo-</u>	<u>suta-</u>	<u>suto-</u>
<u>susi-</u>	<u>susa-</u>	<u>suza-</u>	<u>suko-</u>	<u>s<sup>y</sup>obo-</u>	<u>s<sup>y</sup>owa-</u>	<u>s<sup>y</sup>upa-</u>	<u>s<sup>y</sup>ubi-</u>	<u>s<sup>y</sup>uba-</u>	<u>s<sup>y</sup>ubo-</u>
<u>s<sup>y</sup>uta-</u>	<u>s<sup>y</sup>uru-</u>	<u>s<sup>y</sup>ugo-</u>	<u>ziwa-</u>	<u>ziti-</u>	<u>ziri-</u>	<u>ziko-</u>	<u>zapa-</u>	<u>zaba-</u>	<u>zawa-</u>
<u>zasa-</u>	<u>zage-</u>	<u>zobo-</u>	<u>zowa-</u>	<u>zupa-</u>	<u>zubi-</u>	<u>zuba-</u>	<u>zubo-</u>	<u>zubu-</u>	<u>zumo-</u>
<u>zumu-</u>	<u>zuto-</u>	<u>zut<sup>y</sup>u-</u>	<u>zude-</u>	<u>zuda-</u>	<u>zudo-</u>	<u>zusa-</u>	<u>zus<sup>y</sup>a-</u>	<u>zuza-</u>	<u>zuzo-</u>
<u>zuru-</u>	<u>zuke-</u>	<u>zuga-</u>	<u>zug<sup>y</sup>a-</u>	<u>zugo-</u>	<u>zuhe-</u>	<u>z<sup>y</sup>ari-</u>	<u>z<sup>y</sup>ara-</u>	<u>z<sup>y</sup>obo-</u>	<u>z<sup>y</sup>omo-</u>
<u>z<sup>y</sup>oro-</u>	<u>z<sup>y</sup>uru-</u>	<u>nisi-</u>	<u>nih<sup>i</sup>-</u>	<u>naha-</u>	<u>nota-</u>	<u>noso-</u>	<u>nok<sup>y</sup>a-</u>	<u>nohe-</u>	<u>noho-</u>
<u>nuru-</u>	<u>nugu-</u>	<u>nuhi-</u>	<u>n<sup>y</sup>aha-</u>	<u>n<sup>y</sup>oki-</u>	<u>n<sup>y</sup>oho-</u>	<u>n<sup>y</sup>uri-</u>	<u>n<sup>y</sup>uru-</u>	<u>yaha-</u>	<u>yota-</u>
<u>yoro-</u>	<u>rata-</u>	<u>ruro-</u>	<u>kiri-</u>	<u>kira-</u>	<u>kiru-</u>	<u>kihi-</u>	<u>kehe-</u>	<u>keha-</u>	<u>kape-</u>
<u>kapa-</u>	<u>kata-</u>	<u>kasa-</u>	<u>kari-</u>	<u>kara-</u>	<u>kaki-</u>	<u>kopo-</u>	<u>kote-</u>	<u>koto-</u>	<u>koro-</u>
<u>kupi-</u>	<u>kuwa-</u>	<u>kusu-</u>	<u>kuru-</u>	<u>kuka-</u>	<u>kugo-</u>	<u>kuhi-</u>	<u>kuha-</u>	<u>kuhu-</u>	<u>k<sup>y</sup>ahe-</u>
<u>k<sup>y</sup>aha-</u>	<u>k<sup>y</sup>aho-</u>	<u>k<sup>y</sup>oho-</u>	<u>k<sup>y</sup>uri-</u>	<u>k<sup>y</sup>uru-</u>	<u>giti-</u>	<u>gisi-</u>	<u>gini-</u>	<u>giri-</u>	<u>giro-</u>
<u>giru-</u>	<u>giki-</u>	<u>giku-</u>	<u>gige-</u>	<u>giga-</u>	<u>gigo-</u>	<u>gihi-</u>	<u>geta-</u>	<u>geg<sup>y</sup>o-</u>	<u>gehe-</u>
<u>geha-</u>	<u>geh<sup>y</sup>a-</u>	<u>geho-</u>	<u>gabi-</u>	<u>gaba-</u>	<u>gabo-</u>	<u>gata-</u>	<u>gat<sup>y</sup>a-</u>	<u>gasa-</u>	<u>gara-</u>
<u>garo-</u>	<u>garu-</u>	<u>gaki-</u>	<u>gako-</u>	<u>gaku-</u>	<u>gagi-</u>	<u>gagu-</u>	<u>gaha-</u>	<u>gopo-</u>	<u>gobo-</u>
<u>gomo-</u>	<u>gowa-</u>	<u>gotu-</u>	<u>gotu-</u>	<u>goro-</u>	<u>goku-</u>	<u>goho-</u>	<u>gubi-</u>	<u>guba-</u>	<u>gumo-</u>
<u>guwa-</u>	<u>gusi-</u>	<u>gunu-</u>	<u>guri-</u>	<u>guro-</u>	<u>guru-</u>	<u>guki-</u>	<u>gugi-</u>	<u>guge-</u>	<u>guga-</u>
<u>gug<sup>y</sup>a-</u>	<u>gugo-</u>	<u>gug<sup>y</sup>u-</u>	<u>guhi-</u>	<u>guhe-</u>	<u>guha-</u>	<u>guh<sup>y</sup>a-</u>	<u>guhu-</u>	<u>g<sup>y</sup>awa-</u>	<u>g<sup>y</sup>ara-</u>
<u>g<sup>y</sup>aru-</u>	<u>g<sup>y</sup>agi-</u>	<u>g<sup>y</sup>aga-</u>	<u>g<sup>y</sup>aha-</u>	<u>g<sup>y</sup>uru-</u>	<u>g<sup>y</sup>uk<sup>y</sup>u-</u>	<u>g<sup>y</sup>uga-</u>	<u>g<sup>y</sup>ugo-</u>	<u>g<sup>w</sup>aba-</u>	<u>g<sup>w</sup>aha-</u>
<u>hipo-</u>	<u>hiru-</u>	<u>heh<sup>y</sup>a-</u>	<u>hor<sup>y</sup>a-</u>	<u>hohu-</u>	<u>huwa-</u>	<u>huru-</u>	<u>hug<sup>y</sup>a-</u>	<u>hugu-</u>	<u>huhe-</u>
<u>huha-</u>	<u>huho-</u>	<u>h<sup>y</sup>ara-</u>	<u>h<sup>y</sup>aha-</u>	<u>h<sup>y</sup>aho-</u>	<u>h<sup>y</sup>oro-</u>	<u>h<sup>y</sup>uba-</u>	<u>h<sup>y</sup>uru-</u>	<u>h<sup>w</sup>eha-</u>	<u>Nnu-</u>
<u>Ngi-</u>	<u>Ngu-</u>	<u>iti-</u>	<u>ite-</u>	<u>ita-</u>	<u>itu-</u>	<u>ide-</u>	<u>ida-</u>	<u>isi-</u>	<u>izi-</u>
<u>ihi-</u>	<u>iha-</u>	<u>ehe-</u>	<u>awa-</u>	<u>ati-</u>	<u>ate-</u>	<u>ata-</u>	<u>at<sup>y</sup>a-</u>	<u>atu-</u>	<u>ara-</u>
<u>ar<sup>y</sup>a-</u>	<u>aga-</u>	<u>agu-</u>	<u>aha-</u>	<u>ah<sup>y</sup>a-</u>	<u>oti-</u>	<u>oyo-</u>	<u>ora-</u>	<u>or<sup>y</sup>a-</u>	<u>og<sup>y</sup>a-</u>
<u>ogu-</u>	<u>oho-</u>	<u>upu-</u>	<u>ubu-</u>	<u>uwa-</u>	<u>uzo-</u>	<u>unu-</u>	<u>ura-</u>	<u>uru-</u>	<u>uki-</u>
<u>uku-</u>	<u>ugi-</u>	<u>uge-</u>	<u>uga-</u>	<u>ug<sup>y</sup>a-</u>	<u>ugu-</u>	<u>uhi-</u>	<u>uhe-</u>	<u>uha-</u>	<u>uh<sup>y</sup>a-</u>
<u>uho-</u>	<u>uh<sup>y</sup>o-</u>	<u>uhu-</u>							

## [資料2] 部分反復形の実例

・下線は語頭2音節部分。

・[ ]は当該の語形が使われている作品の一例。(番号は「作品一覧」での番号に対応)

ピチチ[11], ピシシ [7], ピリリリ [5], ピロロロ [4], ピルルル [5], ピキキ [3], ピクク  
ッ [4], バタタ [7], ベレレ [5], ペロロロ [17], パタタ [5], パシシ [8],  
バララ [12], バカカ [3], ブババ [5], ブスス [2], プリリン [7], ブララ [1], ブルル  
[13], プクク [15], ブハハ [6], ピャラ [13], ピョロロ [4], ビババ [12], ビシシ [12],  
ビヨ [18], ピリリ [3], ピロン [3], ピキキ [4], ベキキ [15], ベへへ [6], バビビ  
[12], バチチ [12], バタタ [2], バササ [11], バシシ [7], バリリ [3], バララ [2], バロ  
ロロ [3], バルル [9], バキキ [17], バココ [4], バガガ [3], バゴゴ [7], バヒヒ  
[12], ボワー [17], ボシシ [7], ボロロ [17], ボルル [9], ボキキ [3], ボココ  
[7], ボゴゴ [7], ブババ [7], ブビビ [7], ブババ [7], ブボボ [9], ブワッ [13], ブシシ  
シシ [10], ブヨ [7], ブリリ [18], プロロ [14], ブルル [18], ブヒヒ  
[3], ブハハ [6], ビュルル [10], ブオボ [16], ブオロ [7], ミシシ [10], メララ  
[4], マワー [17], モワワ [7], モニ [17], モガガ [4], ムビビ [17], ムリリ [5], ム  
ギギ [17], ムゲゲ [17], ムギギ [12], ムホホ [16], ムフフ [7], ワタタ [1], ワチャ  
チャ [7], ワシシ [2], ワササ [2], ワハハ [15], チリリ [9], タララ [7], タハハ [16],  
トババ [17], トテテ [8], トタタ [17], トルル [11], トカカ [10], トホホ [18], ツテ  
テ [12], ツタタ [17], ツララ [5], ツルル [10], チャキ [3], チョロ [4], チュド  
ド [10], チュル [12], トゥルル [14], デへ [7], デハハ [17], ダタ [17], ダドド [11],  
ダラ [13], ダハハ [6], ダヒヒ [2], ドババ [7], ドババ [8], ドボボ [17], ドデ  
デ [17], ドダダ [2], ドササ [12], ドザザ [2], ドズズ [7], ドヨ [4], ドロロ  
ロ [9], ドルル [13], ドリリ [16], ドカカ [4], ドガガ [4], ドゴゴ [1], ドへ  
へ [7], ドハハ [12], ドヒヒ [7], ドウド [16], ドウルル [16], シビビ  
[10], シパ [17], サワッ [10], サララ [8], スパパ [2], スポポ [7], スタタ  
[13], ストト [1], スシシ [17], スササ [10], スザザ [10], スコ [14],  
ショボ [13], ショワ [10], シュバ [12], シュビ [7], シュバ [1], シュボ  
[7], シュタ [12], シュルル [14], シュゴ [8], ジワ [10], ジチチ [17], ジリ  
リ [6], ジココ [3], ザバ [12], ザバ [12], ザワッ [13], ザサ [11], ザゲ  
ゲ [17], ゾボ [17], ゾワ [10], ズバ [8], ズビ [7], ズバ [12], ズボ  
[12], ズブ [12], ズモ [1], ズム [12], ズト [7], ズチュ [10], ズデ  
デ [18], ズダ [6], ズド [15], ズサ [7], ズシャ [12], ズザ [12], ズゾ [7], ズ  
ルル [12], ズケ [4], ズガ [9], ズギ [15], ズゴ [10], ズへ [7], ジャ  
リ [5], ジャラ [4], ジョボ [13], ジョモ [17], ジョ [13], ジュル  
ル [13], ニシシ [8], ニヒヒ [6], ナハハ [6], ノタ [4], ノソ [17], ノキ [17], ノ  
へ [8], ノホ [2], ヌルル [12], ヌグ [7], ヌヒ [7], ニヤ [12], ニョ  
キ [4], ニョホ [12], ニユ [17], ニユルル [8], ヤハハ [2], ヨタ [15], ヨロ  
[2], ラタ [3], ルロ [5], キリ [13], キラ [13], キルル [2], キヒ [5], ケ  
へ [5], ケハ [9], カベ [7], カバ [12], カタ [14], カサ [4], カリ [3],  
カラ [1], カキ [3], コボ [14], コテ [12], コト [14], コロ [14], クビ

[12], クワワツ[4], クスス[5], クルル[15], クカカー[10], クゴゴ[7], クヒヒヒ[7], クハハハ[7], クフフ[5], キヤヘヘヘ[9], キヤハハ[9], キヤホホホ[12], キョホホ[7], キュリリ[17], キュルルル[1], ギチチ[3], ギシシ[17], ギニニニ[4], ギリリリ[18], ギロロ[8], ギルルル[5], ギキキ[17], ギクク[10], ギゲゲ[3], ギガガ[16], ギゴゴ[15], ギヒヒ[7], ゲタタ[5], ゲギョギョ[15], ゲヘヘ[2], ゲハハハ[15], ゲヒヤヒヤ[7], ゲホホ[7], ガビビ[7], ガババ[8], ガボボ[7], ガタタ[11], ガチャチャ[17], ガササ[2], ガララ[4], ガロロ[17], ガルル[14], ガキキ[3], ガココン[2], ガクク[3], ガギギ[1], ガググ[7], ガハハ[6], ゴボボ[10], ゴボボ[12], ゴモモ[10], ゴワワン[12], ゴトト[11], ゴツツ[6], ゴロロ[16], ゴクク[3], ゴホホ[7], グビビ[15], グババ[3], グモモ[10], グワワン[16], グシシ[7], グヌヌ[10], グリリリ[4], グロロ[3], グルル[8], グキキ[5], グギギ[6], グゲゲ[17], グガガ[3], グギャギャ[5], グゴゴ[7], グギユギユ[8], グヒヒヒ[7], グヘヘヘ[12], グハハ[8], グヒヤヒヤ[7], グフフ[6], ギャワワ[13], ギャララ[4], ギャルル[11], ギャギギ[15], ギャガガ[15], ギャハハ[2], ギユルル[3], ギユキユ[16], ギユガガ[8], ギユゴゴ[15], グアババ[7], グアハハ[16], ヒポポー[17], ヒルルル[5], ヘヒヤヒヤ[15], ホリヤ[7], ホフフ[8], フワワ[10], フルル[17], フギャギャ[16], フググ[4], フヘヘ[2], フハハ[12], フホホ[7], ヒャララ[10], ヒヤハハ[15], ヒヤホホ[15], ヒョロロ[13], ヒュババ[12], ヒュルル[4], フェハハ[15], ンヌヌ[7], ンギギ[7], ンググ[13], イチチ[7], イテテ[12], イタタ[12], イツツ[7], イデデ[7], イダダ[7], イシシ[12], イジジ[7], イヒヒヒ[15], イハハハ[17], エヘヘ[13], アワワ[12], アチチ[18], アテテ[2], アタタ[1], アチャチャ[12], アツツ[1], アララ[12], アリヤ[17], アガガ[15], アググ[7], アハハ[16], アヒヤヒヤ[12], オチチ[12], オヨヨ[6], オララ[15], オリヤ[17], オギャギャ[7], オググ[7], オホホ[12], ウブブ[10], ウブブ[7], ウワワ[9], ウゾゾ[10], ウヌヌ[6], ウララ[15], ウルル[5], ウキキ[8], ウクク[12], ウギギ[7], ウゲゲ[3], ウガガ[12], ウギャギャ[16], ウググ[4], ウヒヒヒ[18], ウヘヘヘ[16], ウハハ[4], ウヒヤヒヤ[15], ウホホ[4], ウヒョヒョ[15], ウフフ[14]

# Phonological structure of mimetic neologisms and segmental unmarkedness

NASU Akio

(Osaka University of Foreign Studies)

## Keywords

mimetic neologisms, coronal consonants, unmarked value of vowels,  
complementary distribution, unmarked segmental structure

## Abstract

This paper aims to examine the phonological structure of mimetic forms that appear in Japanese cartoons, and show that unmarked segments such as the coronal consonants /d, z/ and the default vowel /u/ tend to be constituents of the first syllable of newly created mimetic stems. Phonological patterns of the newly created mimetics are usually considered to have peculiar characteristics in comparison with those of existing mimetic forms, and in fact many unusual phonotactics can be found in the newly created mimetics. However, a closer examination of segmental distribution in neologisms reveals that it is not always the case and that the phonological structure of mimetic neologisms has fewer peculiar, but more general properties than previously supposed. In this paper we will attempt to capture the phonological properties of such novel mimetics, mainly focusing on the phonological structure of the first CV syllable of the stem. On the basis of our statistical analyses, it will be demonstrated that /u/ tends to appear as a default nucleus of the first syllable when the coronal /z/, which occupies an unmarked place, appears at the onset. In addition to this interesting segmental unmarkedness, our quantitative analysis shows that /o/ is much more likely to appear in the nucleus position than /u/ when the onset consonant is /d/. It turns out that /o/ mimics another default value of the vowel in the first syllable, and that the complementary distribution of the two default vowels is controlled by a phonotactic restriction of Japanese which also plays a role in more general phonological processes such as epenthesis in loanword formation.